

アンヘリカのペルー・クスコ・ケチュア語

— 『資料ラテンアメリカ』第16号 —

【目次と初出】

- | | |
|---|----|
| 1. 心の経験『ことば・こころ』第9号（京都日本語教育センター、1986年） | 1 |
| 2. いま、日本語と結ぶケチュア語の世界『ことば・こころ』第11号（同上、1987年） | 2 |
| 3. インカの心 ケチュア語『スペイン語講座』8月号（日本放送協会、1986年） | 6 |
| 4. 現代ケチュア語講座〔第1回〕『ピラコチャ』第1号（1990年） | 9 |
| 5. ペルーの思い出『みこころ』（桃山カトリック教会、1986年特集号） | 11 |
| 6. ペルーのクリスマスと私『みこころ』（桃山カトリック教会、1989年特集号） | 11 |
| 7. ペルーの野菜料理『朝日新聞』（1990年7月28日） | 12 |

1 9 9 1 年 6 月

ラテンアメリカ資料センター

TIEMPO EXPERIENCIA CORAZON

心の経験

En el tiempo de 14 meses que vivo en Japón, voy comparando las costumbres de Japón y Perú. Los cumpleaños en Japón son invisibles, pues no hacen algarabía en casa ni invitan a los amigos.

En Perú, los cumpleaños tienen mucha pomposidad; empezando los niños hasta los abuelos bailan entre guitarras y canciones, tomando el ponche y otros aperitivos, así se olvidan de los problemas de rutina; los niños también forman grandes grupos de amigos para divertirse.

Ahora en el lugar donde vivo, me sorprende ver a niños jugando en forma dispersa, y también hay algunos que juegan solos, pueda ser que sean niños que se quedan solos mientras sus padres salen a trabajar. Los niños Japoneses en su mayoría son atraídos por el beisball; los niños Peruanos juegan el football, pues se dice que con este deporte, la sensación del cuerpo se hace reluciente como las llamas del fuego. Pienso que los niños que solamente estudian y se quedan en casa, tienden a poseer la timidez.

Por vez primera el año pasado, mi vecina se asomó a mi casa, y al invitarle a pasar, dijo: "... no no, solamente traje este KAIRAMBAN", y con cara de apresurada se regresó rápidamente. Yo pensé que quizás la vecina no quiere mi amistad, y ya en la tarde comenté con mi esposo, y ví que las personas aunque sean conocidas pero que no son parientes ni amigos, solamente se les atiende en la puerta.

Otra cosa también, es que en los ascensores al hacer compañía con mis vecinos, con decir: "Buenos días" no ceden a entablar ninguna conversación. Realmente es muy interesantísimo las Culturas de los Países.

En conclusión, imagino que el corazón de los Japoneses es silencioso e inmóvil como un lago profundo.

日本に住んで、もう14か月になります。その間、日本とペルーの習慣と比べてみたら大へん違うことがわかってきました。その一つは誕生日についてです。日本では、ほとんど家族のなかだけであんまり友人を招待したり家で騒いだりしません。ペルーなどラテンアメリカの国々ではセレナタといって誕生日の前の晩から友人達が集まってギターの演奏や歌で、子供をはじめ祖父母もポンチェを飲みながらダンスをしたりして騒ぐのです。こうして日常の問題や心配事も忘れてしまい、しかも友人の輪を広げることができます。私の国では幼い時からたくさんの友だちに集まってもらうのは大切なこと。だから貧しいこと、苦しいことがあってもひとりで苦しまなくてもすむわけです。

ところが今、私の住んでいる団地では子供たちはばらばらで一人で遊んでいるのです。もしかするとかぎっ子かも。日本の子供たちは野球が好きですが、ペルーではサッカーが盛んです。サッカーは、ぎらぎらとした炎のようなスポーツだと思います。子供はよく勉強するが気の小さい子供になると思います。


約1年前、隣の奥さんがはじめて私の家にいらっしゃいました。私は戸を開けて「どうぞおあがりください」と言いました。奥さんは「いいえ、いいえ、回覧板です」と言って忙しい顔をしてもどってしまいました。その晩、主人に「隣の奥さんは私のこときらいなのかしら」ときいたものです。そのことから日本人は家族や友人でない人の家にうかがう時は、玄関だけで用事を言うことが分かりました。しかも団地のエレベーターのなかでも「おはようございます」だけで、それ以上話しかけることが出来ません。やはり面白い。国々の文化は。私の考えでは、日本人の心は深い湖のように静かで動かないのではないのでしょうか。

ANGELICA PALOMINO DE AOKI
(Cusco-Perú 1985 Agosto 2)
(Universidad S.A.A.Cusco 1981)

アンヘリカ パロミノ 青木

(ペルー・クスコ サンアントニ
オ・アバット大学観光学科卒)
京都日本語教育センター学生





いま、 日本語と結ぶ ケチュア語の世界

ANGELICA PALOMINO DE AOKI

アンヘリカ・パロミーノ青木

略歴 1958年、ペルー、クスコに生まれる。1981年クスコ大学卒業。ケチュア語を教える。1985年4月来日京都日本語教育センター在学中。

アンデスの古きまち、クスコ

—アンヘリカ・青木さんのご出身は、ペルーのクスコですね。

アンヘリカ ええ、ペルーのシェラ地方の中心、クスコです。ペルーは海岸線に細長く沿ったコスタ(Costa)地方、そしてペルーの中央部を占める山岳地シェラ(SIERRA)地方、それにブラジルに接するセルバ(SELVA)地方の三つに分かれているんです。

この三つの地域は、地形も気候も、人の生活もずいぶん違うんですね。コスタは海がありますから当然食生活は海産物にたよりますし、セルバは、というと、ここにアマゾンの源流があるのですが、雨の多いむし暑い所です。村がたくさん点在していて、主に農耕生活を営んでいるのですね。しかし、私の育ったシェラは特別です。アンデスの山々の間に町が静かにたたまれ、息づいているんですね。

—インカ帝国が栄えた所ですね。

アンヘリカ ええ、ここには、12 C. から16 C. までインカ帝国がありました。それまでたくさんの小国があったのですが、それらを統一してインカ帝国ができたのですね。クスコはそのインカ帝国の首都でした。

インカ帝国の誇り

—アンヘリカさんは、クスコでケチュア語の教授をしていらしたと伺いましたが、ケチュア語というのはこの地方の言葉なのですか。

アンヘリカ ええ、今は日本でケチュア語を教えておりますが、ケチュア語というのは、このシェラ地方でインカ時代からずっと話されている言葉のことです。もともとインカ帝国が成立した頃からインカで話される言葉を、この地方の人は「Runasimi」ルナシミとよんでいました。これは“人間の言葉、”という意味ですが、それまでバラバラであった小国を、言語的にも統一したインカが、自らを“人間の言葉を話せる人達、”として自負していた様子がうかがえますね。ところが、1530年、初めてスペイン人がシェラにやって来た時、彼等はシェラの人々をケスワ

(ケチュア語で山や川がたくさんある所の意)に住む人達—とよんだのですね。そして、そこで話される言葉はケスワ語→ケチュア語といわれるようになったのです。しかし、インカ時代の「私達は自分の言葉として、Runasimiを話します、という誇りは、現在にも引き継がれ、シェラの人達が今もってケチュア語を日常語として話しているのだと思いますよ。——現在、ペルーでは、スペイン語が公用語として使われていますね。

アンヘリカ ええ、スペインの植民地となって以来公用語はスペイン語です。コスタやセルバ地方では日常語もスペイン語が話されています。その点、インカ文化を歴史に持つ閉鎖的なシェラ地方は特殊なんですね。もっとも、ケチュア語自体もスペイン語の影響を受けて両方混合されたような単語もずい分あるんですよ。

——ペルーでシェラ地方にだけ伝統的なケチュア語が日常語として話されているのは面白いですね。

アンヘリカ そうですね。それは一つには、たとえスペイン文化がどれだけ入って来ようと、インカ文化は優れたものだというシェラの意識でしょうか。侵略者スペインに対する敵対意識もあったでしょう。またもう一つには、シェラの地形的な特殊性があるでしょうね。アンデスの深い山岳地では、コスタやセルバと異なり、ここに近代的な工業を発展させることは不可能なんですね。そこで必然的に伝統的な農業、じゃがいもや玉蜀黍の栽培を続けざるを得ない。その伝統的な農業生活の中で、スペイン語との接触はそれほど必要ではないのですね。むしろ閉鎖的・伝統的社会の中でケチュア語が求められ続けてきたのでしょう。もともとそれほど確かな文化を持たなかったコスタ地方が、近代的な工業化の中でヨーロッパ化し、スペイン語化していったのとは対照的です。

——ケチュア語には文字もあったのですか。

アンヘリカ いいえ、残念ながらインカ時代、ケチ

ュア語には文字がなかったのです。もっとも絵のような(キープ)結繩語はあったのですが、これは主に量、数などを数える経済生活の中で使われていたようですね。そこで文字はスペイン語から輸入したのです。10年ほど前に、政府はケチュア話のアルファベット文字を新らしく制定しましたが、同じシェラでも北と南ではかなり発音が違うので、聞こえた通りに文字化すると、書き方も場所によって変わってくるのですね。私は文法的に正しいケチュア語を書きますが、それを読めないシェラの人もあるわけです。

“とうもろこし” とケチュア文化

——ケチュア語には、何か際立った特質といったものがありますか。

アンヘリカ ケチュア語の最大の特質は宗教的なイメージがあることです。これは、そのままアンデスの山麓で生活するシェラの生き方の特質でもあるのですね。宗数や祈りは、思想として、言葉として、ケチュア語に強い影響を与えています。インカ時代の宗教は自然崇拜で、山も水も土も「神」でしたが、太陽は全ての「神」でした。太陽の恵みあればこそ農作物があり、わけてもシェラの生活を支える“とうもろこし、があるのです。インカの昔から太陽を崇めてきたシェラの人達は、9月の玉蜀黍の栽培時には豊作を祈り、5月の収穫期には感謝を捧げ、冬期の最も寒い6月には太陽を乞うて「太陽の祭り」(インティ・ライミ)をするんです。「太陽よ、行かないで下さい、離れないで下さい」と祈りの言葉を唱えるんですよ。ケチュア語はその祈りの言葉でもあるのです。

——祈りの言葉が、季節の日常生活の中に溶けこんでいるのですね。

アンヘリカ ええ、シェラ、殊にクスコの日常生活といえば、“とうもろこし、と切り離すことはできません。クスコは、他の地域にくらべ、気候的に恵まれた所で、住みやすく、主食の“じゃがいも、や”と

うもろこし、の栽培に適しているのですね。そこで、特に“とうもろこし、は神なる太陽からの贈り物として、単なる「食物」としてではなく、大切なもの、聖なるものとして特別に扱われてきました。ケチュア語は、日常生活の中でこの“とうもろこし、と面白くかかわってきます。たとえば、収穫した“とうもろこし、を土蔵に貯える時、人々は、土蔵に花を飾り、祈りをあげるんです。「どうぞ来年の5月まで蔵の中にとうもろこしがありますように……」とね。こんな話もあるんですよ。もし誰かがとうもろこしを腐らせたりすると大変です。「まあ、どうしてもっとよくお世話をしなかったのですか。あなたもそんな風になってしまいますよ」と、まるで人が死んだかのように嘆き、悔むのです。インカ時代には、ある玉蜀黍の畠は「神のもの」として聖別されていました。こんな風に、“とうもろこし、はインカ時代から、ある意味でケチュア文化の基盤をなしてきたと思うんですよ。

——しかし、スペインの文化が入って来て、シェラの人々の宗教観も変わってきたのじゃないでしょうか。
アンヘリカ カトリックが入って来て、シェラの古い宗教文化とゆっくり交ってゆきました。インカ時代、例えば「山」はそのもの自体が神だったのですが、キリスト教が入ると、「山」にはキリスト教的な聖なる名前がつけられ、聖地となりました。あるいはキリスト教の祭りが古い宗教スタイルでされたり、太陽の神殿CASA DE SOL (スペイン語)、INTIQU WASIN (ケチュア語)は両方の宗教が混然と同居していたり……とか。しかし、いつの時代にも生活の根底にしっかりした宗教観を持っている、という点では変わりありません。子育ての場合にも、「神様が見ていますよ」という考え方は昔も今も同じです。「神」が太陽であるか、キリスト教的な神であるか……。どちらにしても「神」を畏れ、祈る生活がインカ以来、ケチュア文化を形づくってきたことは確かでしょう。

日本語とケチュア語

——ところで、今、クスコでケチュア語を学習するのはどういう人達ですか。

アンヘリカ 現在、大学でも学生がケチュア語を勉強しておりますし、ケチュア語が必修になっている学部もあるのですが、外国人学習者の場合は、第一にはカトリックの伝道者達です。ペルー人の神父が減少してきていることもあって、現在でも尚、外国人神父が一番多いですね。次にペルーを研究する人類学や社会学の学生、研究者等でしょうか。言語学の研究者も多いですね。

——日本人の学習者もいますか。

アンヘリカ ええ、実は私の主人も、ラテンアメリカの研究者で、クスコでケチュア語を勉強していたのです。

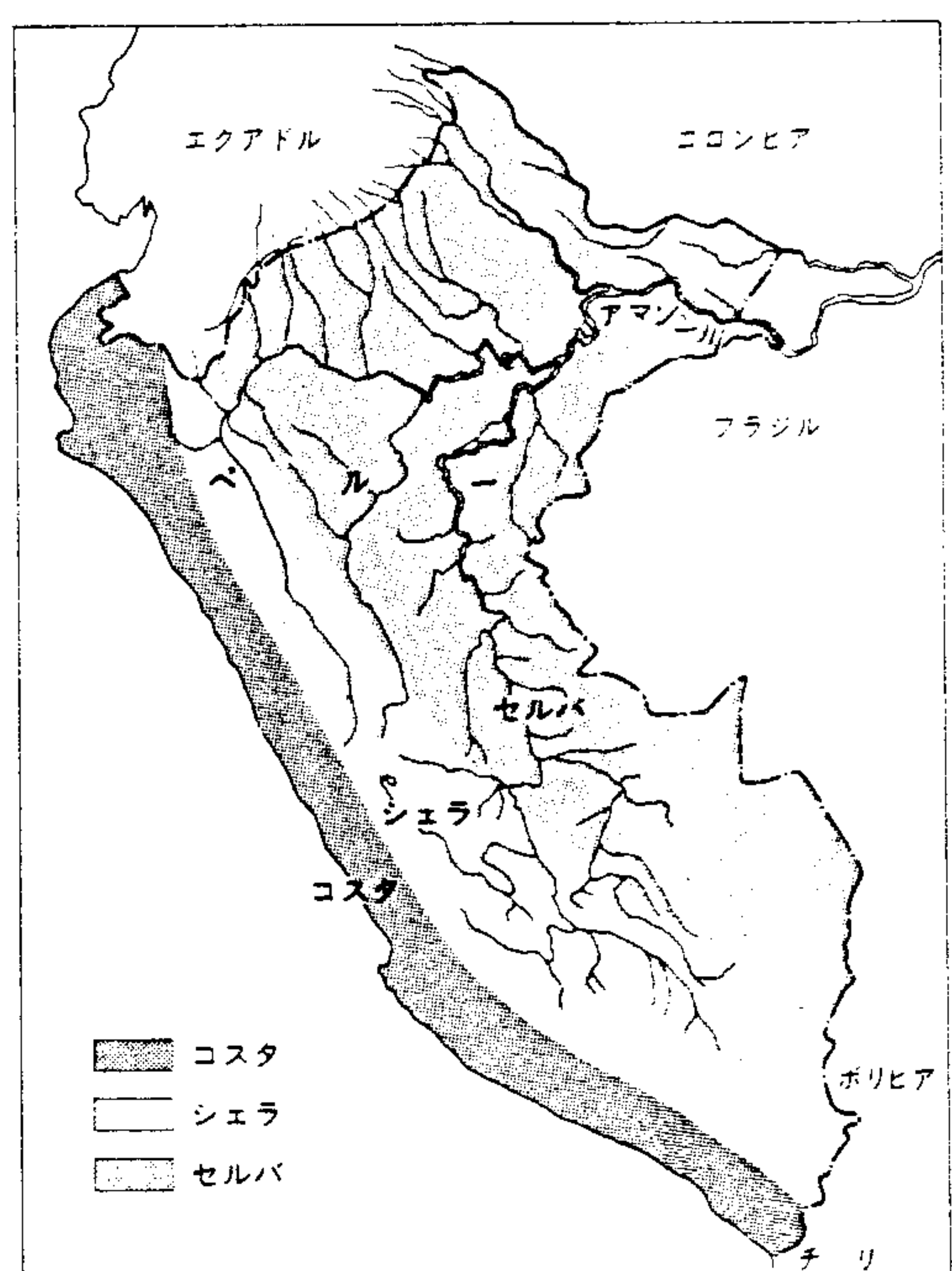
——しかし、日本語とケチュア語では、ずい分違うでしょうね。

アンヘリカ それが不思議なことによく似ているんです。まず文法的に語順が同じなのです。

MESA PATAE t'ANTA KASHAN. というよう
 机 上に パン あります

にね。しかも日本語と同様、ケチュア語でも話し手と聞き手の間に合意のある主語は省くんです。もっ

ともケチュア語では、動詞の変化で主語が分かりますが。また語彙的には擬音語が非常に多い、ということがあります。何でも擬音語で表現しようとする発想、その擬音語をししばし動詞化する発想は、日



本語と実によく似ているのですね。それに、偶然で
しょうか、ケチュア語には日本語と同じ単語がいく
つかあるのです。たとえば、KHAMUY (カーム
ィ)、これは日本語の噛む(カム)と全く同じ意味で
す。URA (ウラ)は裏(ウラ)、YUKAY (ユカイ)
誘拐など……。文字も発音通りに読みますから、日
本人学習者にはケチュア語はそれほど難しくないと思
いますが、発音はケチュア語独得のexplosivo (破
裂音)があつて、かなり難しいようですね。

——不思議ですね。どこかでペルー人と日本人はか
かわりがあつたのでしょうか。

アンヘリカ 顔もペルー人はアジア人と似ています
し、昔、交流があつたと言う人もいますよ。私は主
人と知り合うまで日本も、日本人も全然知らなかつ
たのですが、こちらに来て日本語を学習してみて、
改めてケチュア語文化と日本文化の類似を思います。

——日本にいらして、今、逆に日本語を勉強する立
場に立たされると、難しいこともおありでしょうね。

アンヘリカ そうですね。もちろん、漢字の問題、
発音の問題などいろいろありますが、でも、複雑な
日本語表現に出会って、スペイン語でいくら考えて
も分からない時、ケチュア語で考えるとスーッと分
かることがよくあるんですね。「おいておく」など
という日本語の表現、クラスの大半の外国人生徒には
分かりにくかつたのですが、ケチュア語には同じよ
うな表現があつて、私にはすぐ分かりましたね。こ
れは、言葉の根底にある、ものの見方、考え方が似
ているということだと思います。静かで、やや内向
的で閉鎖的な考え方、人前で自分のことを大声で話
すのを恥じる気持、抽象的なものに対する分析の仕
方など、とても共通していると思うんです。ある微
妙な表現は、スペイン語の字引をいくら引いても分
からない。ケチュア語で考えてはじめて「ああ、そ
ういうことかつて……」。

——両方の文化の違う点もあるのでしょうか。

アンヘリカ ええ、もちろん日本は経済的、物質的

に豊かな国ですし、シェラは工業もなく、近代的物
質文明にも縁がありません。ただシェラの人達はそ
れで充分満足なのです。工場も要らない、スーパー
も要らない、海も要らない。お金も近代化もそれほ
ど魅力はない。何故なら、そこに土地はあるし、豊
かな農作物はあるし、土で造った家はあるし、何も
心配ないんですね。これで幸福なんです。ところが、
日本では本当に忙しいんですね。いつも仕事、お金、
経済……。結婚式も葬式も出産もお金。一般に国が
経済的に発達すると、「目に見えるものに支配されて
宗教的な影響は薄くなりますね。その点シェラは近
代化とは無関係に今尚、宗教的なケチュア文化を育
んでいるのだと思いますよ。

これからの問題

——ケチュア文化の将来と、あなたとのかかわりあ
いについてどうお考えですか。

アンヘリカ シェラのケチュア文化だけではなく、
ペルー全体として「言葉」は国家的に大きな問題だ
と思います。というのは、ケチュア語しか話せない
人達はスペイン語ができないためにコスタなど近代
工業の中に入れられないという職業的差別が出てき
ます。子供もスペイン語ができないというコンプレッ
クスから学校に行かない。当然教育水準は低くなる。
農産物を売る時、計算ができないためにごまかされ
る。もう売らない。そこで自分達の食糧だけ栽培し、
ますます閉鎖的にシェラに閉じこもる。これではペ
ルー全体の経済流通を決局的に悪くして、政治問題
にもなります。ケチュア語は将来も決してなくな
らないのですから、スペイン語圏の人達はもっとケ
チュア語を習い、ケチュア語の人達はスペイン語を
勉強しなければならないと思うんです。

その点、日本はいいですね。言葉は一つですから。
どうぞその言葉を大事にして、美しい日本語を私
も一生懸命勉強しながら、ケチュア語と日本語の
同じ心を見つけてゆきたいと思いますよ。

(インタビュー/構成 西原純子)

インカの心 ケチュア語

アンヘリカ・パロミーノ・デ・青木



女「集会用のパンを、オンボロ車で運んできたかい？」
男「ああ……。鶏の焼き肉も出るさ。」
(リカルド・ジャヴァリーニ絵)

ケチュア語は本当は ^{ルナ・シミ} Runa Simi (人間の言葉) といひます。山岳部の温暖地方^{ケスワ}の人々が話すのを聞いたスペイン人たちが、それをケチュア語と呼ぶようになっただけです。このケチュア語はインカ時代に生まれ、帝国の公用語として育ちました。そして今日でもペルーをはじめ、エクアドルやボリビアといったアンデス諸国で話されています。

私の国ペルーでは、50% の人はスペイン語しか話しません。しかし、30% の人はスペイン語とケチュア語の両方を話します。そしてのこりの 20% の人はケチュア語だけを話します。この数字の中にはアイマラ語を話す人も含まれていますが、それほど多くはあ

りませんし、主としてティティカカ湖周辺に住んでいる人たちです。

ケチュア語はスペイン人によるインカ征服以来、長いあいだ忘れられてきましたが、1975年5月にはスペイン語と並ぶ公用語として復活し(法令第21156号)、さらに同年10月にはその表記法も統一されました(文部大臣令第4023-75号)。ペルーの内部でもケチュア語には種々の方言があります。ペルー問題研究所は6種類の辞書と文法書を出版しているくらいです。しかし、クスコ地方には最も純粋な形のケチュア語が伝えられてきました。というのは、クスコがインカの帝都だったからです。そこで1975年には、クスコ地方のケチュア語の発音をもとにしてアルファベットが考案されたのです。

ケチュア語のアルファベットは5つの母音と16の子音、それに10の多重子音の、合計31文字からできています。つまり、

[母音] a, e, i, o, u.

[子音] ch, h, k, l, ll, m, n, ñ, p, q, r, s, sh, t, w, y.

[多重子音] chh, kh, ph, qh, th. 以上は摩擦音です。

ch', k', p', q', t'. 以上は腔内破裂音です。

次に、ケチュア語の特徴をいくつか紹介しましょう。まず、ケチュア語には擬音語からできた単語がたくさんあります。たとえば、^{ハフチャ}Phaqcha (滝) は、水の落ちる音からきています。また ^{カフワイ}Q'aqway (枝を折る) は、トウモロコシの茎を手で折るときの音からきています。日本人の読者の皆さんにも同じように聞こえますか？

ケチュア語はまた、膠着語のひとつです。接尾辞をつけ加えていくことによって、名詞や動詞の意味を、そして微妙なニュアンスをも変えていきます。^{パラ}Para (雨) を例にとれば、

^{パラムシャン}
Paramushan.

雨が降っています。

^{パラムシャンニヤ}
Paramushanña.

もう雨が降っています。

サッカーを楽しむ子供たち。(ワンカーヨ近郊の寒村アコパルカで)

写真・青木芳夫



パラムシャンブニ
Paramushanpuni.

雨がずっと降っています。

パラムシャンブニニヤ
Paramushanpuniña.

きっともう雨が降っているでしょう。

パラムシャンブニニヤバスチャ
Paramushanpuniñapaschá.

雨がもう降っているかもしれません。

もうひとつの特徴は、一人称複数形が2つあることです。つまり、聞き手を含む形ノカンチス(noqanchis)と、聞き手を含まない、話し手だけの形ノカイク(noqayku)があります。このような例が他の言語にもあるでしょうか？ 私は知りません。

植民地期以来、スペイン語が強制され、ケチュア語は差別されつづけてきました。しかし、お母さんからケチュア語を聞いて育った子供たちは、たとえあとから学校でスペイン語を教わっても、スペイン語は借りものでしかなく、いつもケチュア語で考えます。たとえば、Aquí hay pan. (ここにパンがあります) というべきところを、子供たちは *En aquí hay pan* といってしまう。これは、ケチュア語で カイピ タンタ カシヤン *Kaypi t'anta kashan* と表現するところからきた間違いここに (スペイン語から見たときの) パンが あります なのです。これは1例にすぎませんが、このようにしてケチュア語とその文化が今日までアンデスで生きつづけてきたのだと思います。

パカリン カマニヤヤ
paqarin kamañayá!

それでは アスタ・マニヤーナ
(アンヘリカ・パロミーノ・デ・青木, 「アンデス司牧会」ケチュア語講師)

□みなさん、こんにちは

今回は、第1回目ですからアンデス地域で古くから使われている言語・ケチュア語について簡単に紹介します。

ケチュア語は、アンデス地域を中心に栄えたインカ帝国（現在のエクアドル、ペルー、ボリビア、チリ、アルゼンチンの国々）の＜公用語＞として発展してきましたが、1532年スペインによる征服のためその地位を奪われました。現在ペルー全体の公用語はスペイン語です。それにもかかわらず、アンデス地域の人々は自分たちの間ではケチュア語を話しつつ、受け継いできました。ペルー・クスコの近郊農村のユカイで生まれた私自身、ケチュア語を“母語”として育ちました。小学校に上がり、スペイン語で教育を受けるようになってからも、そして今でも、家族や友だちとはケチュア語で話すほうが多いし、そのほうがほんとうに話した気がします。だから、「ケチュア語とはいったい何ですか、なぜなくならないのですか」と聞かれたら、次のように答えるしかありません。ケチュア語は私たちの日常生活と密接に関係してきた言葉だし、いわば“私たち自身の心の表現”だからです、と。

●ケチュア語、それは「人間の言葉」

ところで、ケチュア語というのは、スペイン人の征服者たちがつけた名前です。qheswa（ケスワ）というのは「山や川がたくさんあるところ」という意味で、そういう地方に住む人々が話す言葉というところから、ケスワ語→ケチュア語と呼ばれるようになったのです。ペルーはコスタ（沿岸部）、シエラ（山岳部）、セルバ（森林部）の3地方に分かれていますが、半砂漠地帯のコスタに比べると、今なおケチュア語が話されているシエラは山や川が多く、適度のみどりに恵まれ、ほんとうに暮らしやすいところです。しかし、最近、ゆたかだった土壌も侵蝕されてきて、多くの農民が住み慣れた故郷を離れなければならなくなっています。非常に残念なことです。それはともかく、私たち自身は、昔も今もケチュア語のことをrunasimi（ルナシミ）と呼んでいます。これは「人間の言葉」という意味です。アイヌ語（アイヌイタク）も「人間の言葉」という意味だそうですね。

●日本語ととっても似ている言葉

私が現在の夫と知り合ったのもケチュア語が縁だったのですが、5年ほど前から日本で暮らすようになり、日本語を覚えるようになりました。私たちの祖先はアメリカ大陸がまだアジア大陸と陸続きであった最後の氷河期の、今から数万年前にアジアから渡ってきたといえますから、日本人の祖先とも同じだったのかも知れません。したがって、ケチュア語と日本語の間にも大きな共通点があります。もちろん、それと同じくらい相違点もあるのですが、ここでは共通点だけを取り上げることにします。

第1に、ケチュア語もまた日本語と同じく膠着語のひとつです。したがって、たくさん接辞（接尾辞や接中辞）を使って動詞や名詞の意味を変えたり、微妙なニュアンスを表現しようしたりします。ケチュア語の勉強は接辞の勉強だといってもいいくらいです。paray（パライ、「雨が降る」）という動詞を例にとれば、次のようになります。

paramushanpuni（パラムシャンプニ）「当地では雨が降りつついています」

「mu」……話し手のところで自然現象が起きていることを示す接辞

「sha」……動詞の進行形を作るための接辞

「n」……動詞の3人称単数現在形の語尾

「puni」……「常に」という意味の接辞

また、「qa（か）」という接辞は日本語の「は」とそっくりのような気がします。これについてはまた別の機会に詳しく説明することにしましょう。

第2に、語順です。ケチュア語の動詞もまた、ふつう補語や目的語のあとにきます。

たとえば、

Noqaqa amauta kani.（ノカカ アマウタ カニ）

「私は 学者 です。」

アンヘリカの現代ケチュア語講座 [第1回]

Noqaqa t'antata mikhuni. (ノカカ タンタタ ミフーニ)

「私はパンを食べます。」

ケチュア語の場合は語順を入れ替えても意味は通じるのですが、例文のほうがはるかに自然な語順です。

最後に、ペルーと日本といえば、日本の人々にとってペルーはインカ文明の中心地として今までもよく知られてきましたが、ペルーの新人統領に日系のアルベルト・フジモリさんが選ばれたことにより、いっそう親近感が増したようです。今回の選挙では、中産階級以上を支持基盤とする高名な作家のバルガス＝リヨサ陣営と都市や農村の貧民層の支持を集めたフジモリ陣営との間で激しい選挙戦が展開されました。リヨサ陣営はフジモリさんが日系であること、またフジモリさんの母親がスペイン語を話せないことを指摘し、大統領になる資格はないと攻撃しました。これに対して、クスコの『スール(南)』という週刊誌は、都市や農村の多くの若者の母親の世代もまたスペイン語を話せないが、それでもペルー人であることに変わりはない、と反論しました。私もまったくこれに同感です。これまでの白人系中心だったペルー社会が、ケチュア系やアイマラ系、そしてそのほかの少数民族系の人々の希望をも実現するような、本当の意味での多文化多民族社会へと発展していくことを、そしてますます多くの人々がスペイン語だけでなくケチュア語などを誇りを持って話せるようになることを期待します。また、この私のケチュア語講座がペルーと日本の人々の交流のために少しでも役立つならば、望外の喜びとなるでしょう。

次回からは、いよいよ実際にケチュア語を覚えていきます。どうぞお楽しみに。

Tupananchiskamaña (トゥパナンチスカマニャ) 「それではまたお会いするときまで」!

(協力/青木芳夫)

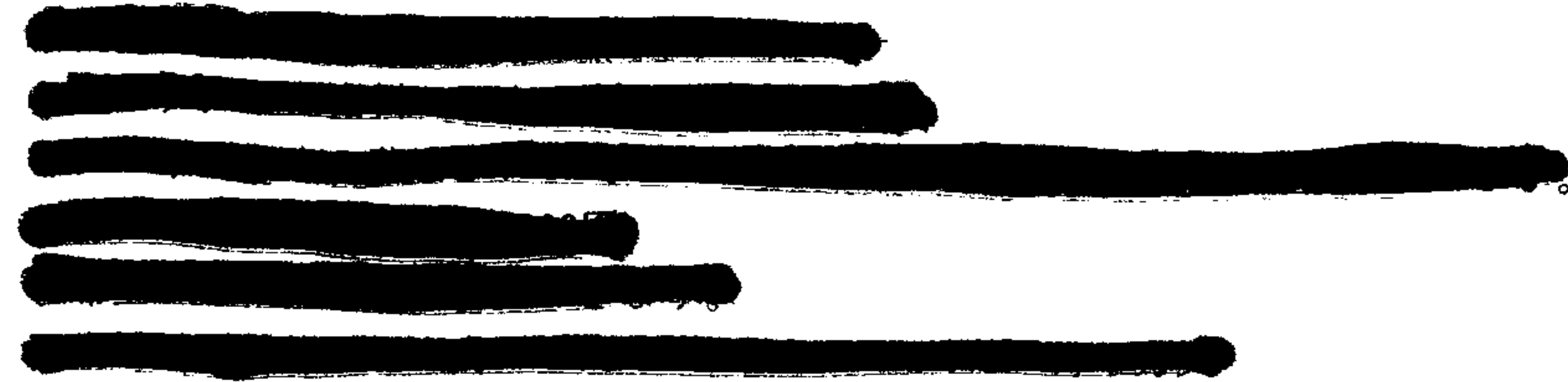
● *Angélica Palomino de Aoki*

1958年、ペルー、クスコに生まれる。

'81年、クスコ大学観光学科卒。

元アンデス司牧研究所ケチュア語講師。'85年来日。

※ケチュア語の表記法については、
'75年10月にペルー政府によって制定された
正書法に準拠しています。



◆ケチュア語の数

1huk	フク
2iskay	イスカイ
3kinsa	キンサ
4tawa	タワ
5pisqa	ピスカ
6soqta	ソクタ
7qanchis	カンチス
8pusaq	プサク
9isqon	イスコン
10chunka	チュンカ

ペルーの思い出

クリスマスは一番たいせつなまつりで、とくに私のまちクスコのユカイでは一週間前からいろいろなおどりのグループがあつまってくる。そしてイエス様の誕生の模型を各家庭で作るのです。その模型は幼な子イエスや聖母マリア、父ヨゼフや羊飼いたちなどが中心です。12月24日はクスコでは「サントランティクイ」という市が立つ。それはクスコの広場で行なわれます。聖者の像やとくべつなワインやパネトンケーキが売りに出される。夜12時になると教会でミサがあるので、皆自分の「ニーニョ」幼な子イエス像を持って教会へ行きます。ミサの後はイエスの誕生を祝って皆で歌をうたったり、おどったり、演奏をしたりして、2時間ぐらい教会で過ごす。その後は自分の家にもどってポンチェというのみものを作ってワインとパネトンを食べて、隣や友だちの家へ行ってあいさつするのです。皆で25日の朝まで爆竹などで遊ぶのです。

(『桃山カトリック教会 みこころ』1986年クリスマス特集号)

ペルーのクリスマスと私

各国の文化や習慣などはそれぞれ違いますが、人々の気持ちは一緒だと思います。というのは、アンデスの自然の中で生まれた私が古くから残された習慣などを体験しながら育てられたからです。

その一は誕生日の事です。私のおじいさんやおばあさんにこれを聞きました。人が生まれるという日は大事な日である。何故かと言うと、神様が誰も見えないところ、お母さんのおなかの中で造ってくれて、それで皆がそれぞれ生まれるからです。それで、ペルーのアンデスでは、人の誕生日には朝早くに起きて神様に祈ってごミサに行きます。その後は御馳走などでパーティーがあります。それからその日は仕事をしないでおきます。時々3日間も続きます。

クリスマスはイエス様の誕生日であり、私達みんなの生まれ変わる日でもあると思います。と言うのはクリスマスの日にはみんなの心の中にイエス様が生まれますので、自分は新しい人になります。プレゼント交換はあまりありませんが食事の交換はあります。クリスマスの日は近所の人々の玄関は開けっ放しにするのです。それは自分の作った食事を「おめでとう」と話しながら交換して楽しむのです。ですから、お互いに各家に入って平和な気持ちで「クリスマスおめでとう」と話して大喜びのパーティーを開きます。家族の中でも、もしケンカがあったとしても、その日はおたがいに「ごめんなさい」と話して平和な家庭でクリスマスを迎えます。

私は、今度のクリスマスでも新しい人になるために頑張りたいと思います。

(『桃山カトリック教会 みこころ』1989年クリスマス特集号)